

「ホーソーンのポリティックス — 権力転位と眼差しの行方」

増 永 俊 一

1. はじめに

「僕の親戚モリヌー少佐」(“My Kinsman, Major Molinoux,” 1832) は、ホーソーンの残した数多の短篇の中でもひとときわ異彩を放つ佳作であることは論を待たないが、その特質は、夢物語、あるいは夢遊病者の手記とでも言った幻想性にあるとされることが多い。事実、この物語は全体として幻想的な趣を有しているが、物語の個々の場面の語りには、むしろアクチュアルな手触りを感じることもある。渡し船に乗りいよいよ町に入ろうとするロビンの出で立ちの描写は詳細を究め、安っぽい灰色の上着、父親譲りの三角帽子、母親が編んだと思われる青い毛糸の靴下などが列挙され、一連の描写はむしろ写実的な傾向が強い。これもまた作者の傑作である「若いグッドマン・ブラウン」(“Young Goodman Brown,” 1835) も、同じく幻想的な物語として知られているが、ブラウンが一体どのような出立ちであったのか、思い浮かべることは難しい。「僕の親戚モリヌー少佐」の語りの写実的な傾向は、主人公ロビンが町での歩みを進め、暗闇に浮かぶ宿屋に差し掛かる以下の場面にも端的に表れている。

He now became entangled in a succession of crooked and narrow streets, which crossed each other, and meandered at no great distance from the

water-side. *The smell of tar was obvious to his nostrils, the masts of vessels pierced the moonlight above the tops of the buildings, and the numerous signs, which Robin paused to read, informed him that he was near the centre of business. But the streets were empty, the shops were closed, and lights were visible only in the second stories of a few dwelling-houses.* At length, on the corner of a narrow lane, through which he was passing, he beheld the broad countenance of a British hero swinging before the door of an inn, whence proceeded *the voices of many guests.* The casement of one of the lower windows was thrown back, and a very thin curtain permitted Robin to distinguish a party at supper, round a well-furnished table. *The fragrance of the good cheer steamed forth into the outer air,* and the youth could not fail to recollect that the last remnant of his travelling stock of provision had yielded to his morning appetite, and that noon had found, and left him, dinnerless.

(*Snow-Image* 211-212; Italics mine)

既に伏線として辺りにはタールの臭いが漂い、マストは月光に向かって突き立ち、宿屋からは客の喧噪が洩れてきて、決して口にすることは出来ないのだが、ご馳走の芳ばしい香りがロビンの鼻孔をくすぐる。語り手はさらに、パンチ酒、パンとベーコン、そして、その場に立ちこめるタバコの煙まで忠実に描き出している。一連の描写は嗅覚、視覚、聴覚、味覚を刺激し、読者の五感に強く訴えかけてくる。このように、この物語には全体的な夢幻性の一方で極めてアクチュアルな描写が展開し、夢幻性とアクチュアリティは交差している。この語りの在り方が、「僕の親戚モリヌー少佐」に一種独特の手触りを与えているのだ。ベイムはこの作品を論じる中で「アクチュアリティが想像力を掻き立て、想像力がアクチュアリティを解釈する。リアリティは両者の混交物である」¹⁾と指摘しているが、まさにこの物語ではア

1) "Actuality conditions imagination, and imagination interprets actuality. Reality is a composite." Baym, *The Shape of Hawthorne's Career*, 34.

クチュアリティと想像力が相互に有効に作用し、心の真実に迫るリアリティは、このアクチュアルな筆遣いから生まれていると言えよう。

以上のように、「僕の親戚モリヌー少佐」の有する魅力のひとつは、写実と幻想とが交差する語りにあるが、加えてこの作品に豊穡を与えているものは、筆者の眼差しが個人と国家の両者に注がれているという物語の重層性である。夜の見知らぬ町を一人さまよう若者の体験をめぐる、道徳的解釈²⁾、心理学的解釈³⁾、また、民話・神話的解釈⁴⁾が繰り広げられてきたが、これらは概ね普遍的な成長譚としてこの物語を読むもので、ロビンのパーソナルな体験に焦点が当てられていると言っていいだろう。一方、物語冒頭に置かれる簡潔な時代背景の解説によって、独立革命前夜というその歴史性が意識されるとき、ロビン個人のイニシエーションは、「若きアメリカ」の誕生という国家のイニシエーションにも重ね合わせられてゆく⁵⁾。この短篇の重層性は、多様な読みを許容する。

しかし、この物語がイニシエーション物語であるとして、それが道徳的、心理学的解釈が注目するパーソナルなイニシエーションであろうと、「若きアメリカ」論のようなナショナルなものであろうとも、旅をするロビンの属性として明らかな前提が一つある。それは、自身が何度となく口にする「抜け目のなさ (shrewdness)」とは裏腹のロビンの無知である。この物語の舞台を独立革命前夜だと想定したとし

- 2) “The theme of this remarkable tale is in the direct line of one of Hawthorne’s metaphysical preoccupations: the painful but paradoxically curative power of an apprehension of the nature of moral reality.” Gross, “Hawthorne’s ‘My Kinsman, Major Molineux’ : History as Moral Adventure.” 106.
- 3) “Robin’s real search is for an idealized father—a figure of benevolent power who will shield him from the world and lend him prestige.” Crews, *The Sins of Fathers*, 74.
- 4) “He [Molineux] is the Sacrificed King, the Royal Scapegoat, the ‘dead potentate…majestic still in his agony’ around whom the townsfolk ‘throng in mockery.’ Frazer analyzes the Scapegoat King as a ritual role invested with two functions, the expulsion of evil and the sacrificial death of the divine ruler whose declining potency is renewed in his successor.” Hoffman, *Form and Fable in American Fiction*, 118.
- 5) “The sturdy pious youth Robin, the son of the typical farmer-clergyman, represents the young America; . . . The kinsman is Hawthorne’s, and ours (if we are Americans) as well as Robin’s…” Leavis, “Hawthorne as Poet,” 38.

でも、そのことは読者のみが特権的に知っているに過ぎない。作中人物ロビンは、自らが置かれることになる歴史状況を全く理解できないでいる。不条理な体験に翻弄されてロビンが直面する戸惑いは、今にも権力の転覆が起ころうとしているこの町の不穏な空気を感知できないことにすべて起因する。ロビンはナイーブである。この作中人物の資質は、この短篇をめぐる何れの解釈においても、広く共有されるべき前提なのである。

2. 「独立革命」というモチーフ — リップとロビンの場合

さて、アメリカの独立をめぐるその状況の変化に戸惑う小説の登場人物は、ホーソーンのロビンだけではない。アーヴィング (Washington Irving) のリップ (“Rip Van Winkle,” *The Sketch Book*, 1819-20) もまたそうである。家出をして愛犬ウルフと共に山に入り、そこで小人と出会い、共に酒を飲み、一眠りして村に戻ってみればすっかり様子が変わっている。村を出るときには「ジョージ陛下」であった宿屋に掛かる看板の肖像が、今では見たこともない「ワシントン將軍」へと付け変わり、リップはロビン同様戸惑いを隠せない。言うまでもなく、リップが舞い戻ったのはもはや植民地ではなく、独立国家となったアメリカである。フィクションのレベルでは、ロビンとリップはほぼ同じ時期を生きていたことになる。そして、この物語もまた、リップの口やかましい妻（リップは夜ごと妻からの“curtain lecture”に苛まれる）をイギリスに見立て、村に戻ってみればもはやあの怖い妻もいないというアメリカ独立寓話として読まれる点でも、「僕の親戚モリヌー少佐」と並行関係にある。また、月明かりに照らされた非日常的空間の夜の町を彷徨するロビンと、山で不思議な小人と出会い親しく酒を酌み交わすというリップは、共に日常を逸脱した点でも共通する。リップが「ほんの一眠り」している間に20年という時間が経過していたという、言わばタイムワープ体験も非日常的で、アーヴィングはリップの「ほんの一眠り」によって激動の時代の変化の早さを強調して止まない。

しかし、独立革命期の急激な変化を共にモチーフとしながら、リップとロビンそれぞれが体験した出来事の実質は、まったく異なっている。リップは楽しいゲーム、美味しいお酒、そして健やかな眠りに誘われるが、ロビンは食べるものもなく空腹のまま足を棒にして歩き続ける。リップは安逸で愉快的な体験をしたが、深夜に親戚モリヌー少佐を血眼で探し回るロビンの彷徨は、修行僧にも似て苦難の連続だ。そして、何よりも対照的であるのは、両人物の「独立革命」という一大事に対する関与のあり方である。リップは狂気じみた暴動にいっさい巻き込まれることなく、その現場からは遠く離れて眠り込んでいるが、ロビンは訳も分からないまま、その渦中に投げ込まれてしまう。そして、ついには恥辱にまみれた緑者の姿をロビンは凝視する。逃避するリップと暴力と対峙するロビン。民主党員ホーソーンが現実にとれほど政治的であったかはさておいて、ともに新国家「アメリカ」の誕生に関わる「リップ・ヴァン・ウィンクル」と「僕の親戚モリヌー少佐」を並べて見た場合、ひたすらヨーロッパに羨望の眼差しを投げ掛けるノンポリティカルな様子のアーヴィングと、事態に関与しようとするホーソーンの姿勢は、極めて異質だ。アメリカ独立革命前夜という時代と舞台に対して、少なくともホーソーンのロビンは正面に向き合うのである⁶⁾。

3. ホーソーンのポリティックス

先述の通り、「僕の親戚モリヌー少佐」を一人の若者のイニシエーション物語として捉えるか、アメリカ独立をめぐる国家のイニシエーションの寓話として読むかは、作品冒頭に置かれる簡潔な歴史状況を特定化しようとするか否かの読者の衝

6) マサチューセッツ湾岸植民地以来の家系に属するホーソーン自身にとって、アメリカの歴史は家族の歴史とも重なるのだが、加えて19世紀という時代が「歴史ブーム」に沸き返っていたということとも無縁ではあるまい (Buell, *New England Literary Culture*, 1986 参照)。政治的、経済的成熟への歩みを進める19世紀アメリカにおいて、さらに文化的成熟を目指すには国家のアイデンティティの再確認は不可欠で、勢い人々の関心は国家の過去へと向かった。それは未だ払拭出来ずにいるヨーロッパの文化的影響力からの脱却、離脱の意思でもあっただろう。

動の有無による。そして、その歴史性を前面に打ち出す場合でも、「百年足らず前のある夏の夜」という年代を額面通り受け取るよりも、むしろその舞台を独立革命前夜と想定し、また描かれる暴動についても、印紙条例に端を発した1765年のハッチンソン総督官邸襲撃事件をそのモチーフとすることは、大方の了解事項だ(Newman, 218)。トーマス・ハッチンソン(Thomas Hutchinson: 1711-1780)は、ホーソーンが「僕の親戚モリスヌー少佐」を執筆するにあたって参照したとされる*History of Massachusetts Bay* (1767)の著者であるが、ホーソーンは後に子供向け歴史物語の一つ、『自由の木』(*Liberty Tree*, 1841:後に*The Whole History of Grandfather's Chair*, 1851として統合)においても“The Hutchinson Mob”という項を設け、事の成り行きを聞き終えた孫のローレンスと祖父は、次のようなやりとりを交わしている。

“Grandfather,” said Laurence indignantly, “if the people acted in this manner, they were not worthy of even so much liberty as the King of England was willing to allow them.”

“*It was a most unjustifiable act*, like many other popular movements at that time,” replied Grandfather. “But we must not decide against *the justice of the people’s cause*, merely because an excited mob was guilty of outrageous violence …”

(*True Stories* 159; Italics mine)

ローレンスは暴徒たちの狼藉に憤るが、祖父もそれを受けて独立を叫ぶ民衆の大義よりも暴力の不当性を口にし、それは作者ホーソーンの思いでもある。暴力集団である独立派よりも、イギリスと植民地双方の利害の狭間に立つハッチンソンの悲哀の方にむしろ共感している風情がここにはある。

一方で、上記引用後半で祖父は「人々の大義の正当性」についても言い及んでいる。ホーソーンは、宗主国イギリスの圧政下にあった植民地の人々の苦悩もまた、斟酌

する。「総督官邸の伝説」4部作（“Legends of the Province House”）は、独立革命を控えた時期を集中して描き出しているが、なかでも「レディ・エレノアのマント」（Lady Eleanore's Mantle, 1838）において、イギリスからやって来た貴婦人エレノアが植民地人ジャーヴェイス（Jervayse）を踏み台として馬車から降り立つシーンは、当時のイギリスと植民地アメリカとの関係を戯画化し、支配と被支配という両者の関係性をあまりにも直截な形で描出する。これは、「貴族政治と先祖代々の自尊心」が「人間の共感と血縁にある者同士の本質を踏みにじる」象徴的な光景なのである。

Then though as lightly as a sunbeam on a cloud, she placed her foot upon the cowering form, and extended her hand to meet that of the Governor. . . ; and never, surely, was there *an apter emblem of aristocracy and hereditary pride, trampling on human sympathies and the kindred nature, than these figures presented at that moment.*

(TT 276; Italics mine)

支配者イギリスの横暴と抑圧される植民地の屈辱をここに読み取ることはたやすい。けれども、4部作の語り手である「私」に対して総督官邸にまつわる伝説を語る老紳士が、実は「老王党派」（“the aged loyalist” TT 272）であったことは、アメリカ独立の大義に微妙な影を落とす。「総督官邸の伝説」4部作は何れもデモクラシー伝播の堡壘である『デモクラティック・レビュー』（*The United States Magazine and Democratic Review*）を発表媒体としていたが、老王党派に革命を語らせるという設定は、この民主党機関誌で展開されていた盲目的な民主主義礼讃と進歩思想へのホーソーンの密かな抵抗にも映る⁷⁾。しかし、「人間の共感」（“human

7) この物語の歴史性とは、表面上、宗主国イギリスによる植民地に対する圧政を戯画的に描くことで、後に発生するアメリカ独立革命の正当性を間接的に擁護するものと捉えることがで

sympathies”) という言葉遣いに見られるように、この描写は政治イデオロギーな糾弾であると言うよりも、むしろ人倫にもとる行為に対する道徳的な非難の色彩が強い。マシーセンは、ホーソーンが民主党員であり且つ保守主義者であることを「パラドックス」だと指摘したが (AR 318)、ホーソーンがその眼差しを注ぐのは王党派／独立派何れかの大義であるよりも、むしろ支配／被支配の関係性の元にある人間模様だと言えるだろう。

「僕の親戚モリヌー少佐」においてことさらスリリングに練り広げられているのも、やはり町の人々とロビンの支配／被支配をめぐるある種の権力闘争とそれに伴う人心の動揺である。権力者「モリヌー」を後ろ盾としたロビンが期待するのは、その名前を耳にしてひれ伏す人々の姿であるが、実際に彼が受け取るのは住人から投げ掛けられる嘲りであった。そして、この権力闘争は、両者の交わす眼差しの内に発生する、視線のドラマとして展開するのだ。

4. 視線のドラマ—見ること／見られること

ロビンが見知らぬ町に足を踏み入れたのは、尋常ではない「月夜の九時近く」(209) のことであったが、この時点ですでに視線のドラマは始まる。渡し船の船頭が掲げるランタンと月明かりに照らされて、ロビンはまずその風采を隅々まで吟味される。

He was a youth of barely eighteen years, evidently country-bred, and now, as it should seem, upon his first visit to town. He was clad in a coarse gray coat, well worn, but in excellent repair; his under garments were durably constructed of leather, and fitted tight to a pair of serviceable and well-

きるが、Seymour L. Gross は、もし『デモクラティック・レビュー』の編集者であったオサリヴァン (John Louis O'Sullivan: 1813-1895) が「隠された意図」(“counter statement,” 550) に気付いていたとしたら、とうてい掲載を承服していなかっただろうと推測している。Gross, “Hawthorne’s ‘Lady Eleanore’s Mantle’ as History.”

shaped limbs; his stockings of blue yarn were the incontrovertible work of a mother or a sister; and on his head was a three-cornered hat, which in its better days had perhaps sheltered the graver brow of the lad's father. Under his left arm was a heavy cudgel formed of an oak sapling, and retaining a part of the hardened root; and his equipment was completed by a wallet, not so abundantly stocked as to incommode the vigorous shoulders on which it hung. Brown, curly hair, well-shaped features, and bright, cheerful eyes were nature's gifts, and worth all that art could have done for his adornment.

(209)

田舎者、粗末な風采に侮ばれる貧しさ、屈強な肉体、そしてきらきらと輝く明るい目。船頭はロビンを凝視し、その素性を詮索し、そして見事に見抜いてしまった。ロビンは、風采からあっけなくそのアイデンティティを暴かれ、船頭の眼差しによってすでにその支配下にある。しかし、この物語はこの名もない船頭の物語ではない。船頭の眼差しの背後にあるのは、語り手／作者の眼差しであり、それが読者に提示されているに過ぎない。この場において、ロビンは確かに全知の視点に支配されているのである。

しかし、船着き場から町へ向かうロビンの「意気込んだ目」(210)は、直ぐさま眼差しの反撃を開始する。「狭い通りを眺め渡し、・・・小さく粗末なあばら小屋をしげしげと吟味した」(210)ことに始まり、全知の視点はいつの間にかロビンの視線の赴くところに寄り添ってゆく(三宅 88-109)。親戚モリヌーの所在を町中探し回るロビンだが、その探索には一定のパターンがある。質問に先立ってまず十分にその人物の風体を見定め、十分な観察を終えた後、おもむろに声をかけるのだ。無論、モリヌー少佐を除いては誰一人知人もいないこの町で、ロビンが極度の緊張を強いられていることは無理からぬ事ではあるが、その慎重さは大きく視覚に依存している。辿り着いた宿屋の場面においても、ロビンの眼差しは強力だ。

But though Robin felt a sort of brotherhood with these strangers, *his eyes were attracted from them to a person who stood near the door*, holding whispered conversation with a group of ill-dressed associates. His features were separately striking almost to grotesqueness, and the whole face left a deep impression on the memory. The forehead bulged out into a double prominence, with a vale between; the nose came boldly forth in an irregular curve, and its bridge was of more than a finger's breadth; the eyebrows were deep and shaggy, and the eyes glowed beneath them like fire in a cave.

(213, Italics mine)

言うまでもなく、この人物は後に発生する暴動の首謀者であるが、その異形をロビンは食い入るように見つめる。ジャン・スタロバンスキーは、『自由の創出—十八世紀の芸術と思想』において、18世紀フランスの建築家クロード・ニコラ・ルドゥー(1736-1806)のスケッチを18世紀的精神の例証として引き合いに出しているが、このスケッチにある巨大な目とは、今や神に代わって世界の絶対的支配者となった人間のメタファーである(スタロバンスキー 218)。ロビンの視覚オブセッションは、この町における自己の優位性の確立と、権力を志向する⁸⁾。時にロビンは、見ることと見られることに必然的に伴う距離を逸脱して、老人の上着の裾を掴み、直接的、物理的に支配しようとする。また、異様な顔付きの男を、すんでのところでその棍棒でうち倒そうとした。しかし、ロビンは大いに自信のある腕っ節から繰り出される身体的暴力で相手を支配することを思い止まり、結局「きらきらと輝く明るい目」から放たれるその眼差しによって、その立身出世を成就しようとするの

8) ポー(Edgar Allan Poe: 1809-49)の「告げ口心臓」(“The Tell-Tale Heart,” 1843)もまたゴシック・ホラー小説だが、「私」が殺人に至る唯一の動機として陳述していることが、老人の薄いヴェールの掛かった「青い眼」であったことは興味深い。狂人とおぼしき「私」の動機無き殺人も、目というものが支配／被支配を司る身体的器官であるという観点からすれば、必ずしも狂気の沙汰とは言い切れない。すなわち、「私」は老人を殺害することによって、その「邪悪な眼」の「支配」から永遠に逃れようとしたという一定の(正気の)論理が成立する可能性がある。

である。それは、「世界を啖いつくす目」（高山 112）である。そして、ロビンの見る衝動は、松明に照らし出されたタールまみれのモリヌー少佐と遭遇することで、ついにその頂点を極める。

一方で、この苛烈な視覚的オブセッションは、ロビンの孤立をさらに深刻なものとしている。高山宏は視覚というものを「孤立化の器官」（高山 148）と指摘しているが、見るということは、取りも直さず対象物との距離を顕在化させる。また、見るロビンは、同時に町の人々の視線に晒され見られるロビンでもある。宿屋では、ロビンの目はそこにいるすべての客に注がれるが、一方で「全員の目」が「戸口に立っている田舎者の青年」（214）に注がれる。ここにそれぞれの視線は交錯し、ロビンは一層その孤独を深め、見れば見るほどロビンはその疎外を深めてゆく。確かに、拒絶ではなく受容してくれる眼差しが無いわけではなかった。しかし、それは夜の町の娼婦とおぼしき女が投げかける怪しげな視線に他ならない。そして、ついに「遠くにあるものの形を何とか見定めようとする、彼の目がそれらを捉えたと思った瞬間、亡霊のように霞み、遠離ってゆく」⁹⁾という視覚の惑乱状態にロビンは陥るのである。

5. 空白の場所とその偏在

「僕の親戚モリヌー少佐」というパーソナルなタイトルをもった物語は、このように、終始「僕」が見ることに強迫的に囚われる物語である。いよいよ、クライマックスも近づいて、音も光もその強度を増すが、人々の交わす視線もその力を増す。二重の顔をした男の眼差しはロビンにまともに注がれ、その睨みつけるような視線にロビンは完全に支配され、立ちすくむ。そして、屈辱的な姿でさらし者となっているモリヌー少佐の眼も、避けようもなくロビンの眼と合う。「二人は黙ってお互いを見つめ合い、憐憫と恐怖が緋い交ぜとなってロビンの膝は震え、髪の毛は逆

9) “he endeavored to define the forms of distant objects, starting away with almost ghostly indistinctness, just as his eye appeared to grasp them,” 221.

立つ」¹⁰⁾のだ。宗主国イギリスの身代わりとなったモリヌー少佐の屈辱と、植民地の住民の勝利の雄叫び。ここに権力の転覆は成就し、この劇的場面を目撃したロビンは、誰よりも大きな声で笑い飛ばすことで見事に権力を乗り換えたかのようである¹¹⁾。そして、「若きアメリカ」、あるいは若きベンジャミン・フランクリンとして今後順調な歩みを続けてゆくことが期待されるのである。

ロビンがこの旅で辿る経緯は、事実ベンジャミン・フランクリンの実体験と酷似している (Strout 11)。独立後のアメリカ的精神そのものを体現していると言ってもよいフランクリンは時に17歳、立身出世を夢見た彼は、家を出てフィラデルフィアの印刷業者の元を目指す。渡し船に乗り、ようやく町に辿り着いたものの金もなく空腹で、とあるクエイカーの教会で眠り込み、宿屋では逃亡してきた年季奉公人と疑われる。このように、ロビンの旅とフランクリンの体験は、全くと言っていいほど重なり合っている。「僕の親戚モリヌー少佐」を執筆時、ホーソンはフランクリンの著作を五回も図書館から借り出しており (Kesselring 23-24)、フランクリンがロビンのモデルの一人であることはほぼ間違いない。だが、ロビンは決してフランクリンその人ではなく、あくまで作者の手になる普遍性を備えた虚構の人物なのである。

本論では、これまで「僕の親戚モリヌー少佐」の歴史性については言及してきたが、「歴史物語」であると断定することは避けてきた。たとえば、時代も場所も人物も、

10) "They stared at each other in silence, and Robin's knees shook, and his hair bristled, with a mixture of pity and terror," 229.

11) 町に入って以来徹底的な拒絶に直面してきたロビンは、群衆と共に笑うことでその疎外の状況から一時的には解放される。政治イデオロギー的にみれば、ロビンは変節者で、この場面は彼が王党派から独立派へと転向した瞬間である。しかし、この笑いの共有がもたらした共同性の幻想とでも言うべきものから、ロビンはたちまちにして覚醒する。そもそも、この集団に発生した笑いとは「伝染病」(230)に準えられ、瞬間に群衆とロビンを捕らえる病的な性質のものであったことが記されており、ロビンはこの場面において全面的に受動的な状況にあった (McWilliams 87)。人波が通り過ぎる時、石柱にしがみつくとこの彼の行動に顕在化するように、ロビンは集団の狂気に身を委ねることを本能的に回避する。このロビンの姿には、作者ホーソンのポリティックスが象徴的に集約されているのではないだろうか。そして、群衆が去った後、静寂の中に一人取り残され、ロビンは再び孤立するのである。

基本的に史実を踏まえる『おじいちゃんの椅子』シリーズは、子供向けとはいえホーソンが著したある種の歴史物語であるが、「僕の親戚モリヌー少佐」をそれらと等質の歴史物語と断ずることは難しい。「ニューイングランド植民地のとある小さな都市」(210)とは書いてあっても、「ボストン」という特定の地名はテキストのどこにも見出されない。独立革命前夜と思われる時代も、「今から百年足らず前」(209)と操作される。また、実際には独立派であった「モリヌー」は、物語では王党派に逆転する。特定の歴史的コンテキストに置かれたかに見えるロビンであるが、歴史座標は意識的にずらされ、町は固有名詞を欠き、テキストはもはや「アメリカ独立革命前夜」という特定のエポックすら超越してゆく。そして、これら空白の固有名詞と実質的な時代の消失は、この物語が権力転位に関する一般理論へと昇華する可能性を拓く。

果たしてロビンがモデルと目されるフランクリン同様、今後立派に立身出世を上げてゆけるのか、そのことを語り手は明らかにはしない。ただ、暴動の熱狂が通り過ぎた後、ロビンの傍らに立つ紳士が、「君は頭の回転が早い若者だから、たぶん親戚のモリヌー少佐の助けが無くとも、出世できるかも知れないよ」¹²⁾と語りかけるだけである。翻ってみて、ホーソンの19世紀は、あらゆる社会改良運動が繰り広げられ、その中で奴隷制反対運動や女性の権利拡張運動が展開された。そして、南部と北部という地域格差の拡がりは、やがて悲劇的な内戦を不可避のものとする。物語結末においてロビンが遭遇する騒然たる雰囲気は、支配／被支配の関係性が動揺し、今にも逆転しようとする19世紀半ばのアメリカの状況にも適用できる。“I have— authority” (211)と宣う老人のコートの裾を掴んで離さないロビンの権力依存と、哄笑の後に自らに訪れる深い喪失感。一体あの騒ぎは何だったのか。

佳作「僕の親戚モリヌー少佐」は、アメリカの歴史的コンテキストを絡めつつ、同時にそれらにとらわれない普遍性をも有している。しばしば、オープン・エンドだとされるこの物語は、ロビンとモリヌーの凍り付くような対峙で幕を下ろさず、

12) “... Or, if you prefer to remain with us, perhaps, as you are a shrewd youth, you may rise in the world, without the help of your kinsman, Major Molineux.” 231.

狂気と熱狂の後のロビンの覚醒にまで作者は筆を進める。どのような時代の革命とその熱狂にも、やがては覚醒の瞬間が訪れるのではないか。時代の熱狂から一步退いて目を凝らす作家ホーソーンが、そこに居る。視線のドラマの内に対立と共感の行方を模索するこの物語は、ディセンサスの時代であったホーソーンの19世紀も、さらには混沌の21世紀現在をも照射する普遍的価値を備えているのである。

*本稿は、日本ナサニエル・ホーソーン協会第27回全国大会(2008年5月23日、於:広島ガーデンパレス)の〈ワークショップ:「僕の親戚モリヌー少佐」を読む〉における口頭発表原稿を加筆修正したものである。

Bibliography

- Baym, Nina. *The Shape of Hawthorne's Career*. Ithaca: Cornell UP, 1976.
- Buell, Lawrence. *New England Literary Culture: From Revolution through Renaissance*. Cambridge: Cambridge UP, 1986.
- Crews, Frederick. *The Sins of Fathers: Hawthorne's Psychological Themes*. Berkley: U of California P, 1966.
- Donohue, Agnes. *Hawthorne: Calvin's Ironic Stepchild*. Kent: The Kent State UP, 1985.
- Franklin, Benjamin. *The Autobiography*. New York: Vintage Books, The Library of America, 1990.
- Gross, Seymour L. "Hawthorne's 'My Kinsman, Major Molineux': History as Moral Adventure." *Nineteenth-Century Fiction*, vol. 12, No.2 (Sep., 1957), 97-109.
- . "Hawthorne's 'Lady Eleanore's Mantle,' as History, *The Journal of English and Germanic Philology*, vol. 54 (1955), 549-554.
- Hawthorne, Nathaniel. "My Kinsman, Major Molineux." *The Snow Image and Uncollected Tales*. Columbus: Ohio State UP, 1974, 208-231. vol. 11 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*.
- . "Lady Eleanore's Mantle." *The Twice-told Tales*. Columbus: Ohio

- State UP, 1974, 271-289. vol. 9 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*.
- . “The Hutchinson Mob.” *True Stories*. Columbus: Ohio State UP, 1972, 154-160. vol. 6 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*.
- Hoffman, Daniel. *Form and Fable in American Fiction*. Charlottesville: UP of Virginia, 1961.
- Irving, Washington. “Rip Van Winkle.” *The Sketch book of Geoffrey Crayon, Gent.* in *Washington Irving: History, Tales and Sketches, The Library of America*, vol.16 (1983), 769-785.
- Kesselring, Marion L. *Hawthorne’s Reading 1828-1850: A Transcription and Identification of Titles Recorded in the Charge-Books of the Salem Athenaeum*. Haskell House Publishers, 1975.
- Leavis, Q.D. “Hawthorne as Poet,” *Sewanee Review* 59 (1951), collected in *Hawthorne: A Collection of Critical Essays*, ed. A. N. Kaul. Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1966.
- Male, Roy R. *Hawthorne’s Tragic Vision*. Austin: U of Texas P, 1957.
- Matthiessen, F. O. *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*. New York: Oxford UP, 1941.
- McWilliams Jr., John P. *Hawthorne, Melville, and the American Character : A Looking glass Business*. Cambridge : Cambridge UP, 1984.
- Newman, Lea Bertani, Vozar. *A Reader’s Guide to the Short Stories of Nathaniel Hawthorne*. Boston: G.K. Hall & Co, 1979.
- Pearce, Roy Harvey. “Hawthorne and the Sense of the Past or, the Immortality of Major Molineux,” *E. L. H.*, 21 (Dec. 1954).
- Shaw, Peter. “Fathers, Sons, and the Ambiguities of Revolution in ‘My Kinsman, Major Molineux.’” *The New England Quarterly*, vol. 49 (1976) , 559-576.
- Smith, Julian. “Coming of Age in America: Young Ben Franklin and Robin Molineux.” *American Quarterly*, vol. 17 (1965) , 550-558.
- Starobinski, Jean. *The Invention of Liberty: 1700-1789*. New York: Rizzoli International Publications, 1964.
- (ジャン・スタロビンスキー 『自由の創出—十八世紀の芸術と思想』 小西嘉幸訳、白水社、1982.)
- Strout, Cushing. *Making American Tradition: Visions and Revisions from Ben Franklin to Alice Walker*. New Brunswick: Rutgers UP, 1990.
- White, Charles Dodd. “Hawthorne’s ‘My Kinsman, Major Molineux.’” *Explicator*,

vol. 65-4 (2007, Summer), 215-217.

———. "Hawthorne's Edward Randolph's Portrait." *Explicator*, vol. 66-1 (2007, Fall), 9-11.

高山宏『目の中の劇場 — アリス狩り』青土社, 1995.

増永俊一『アレゴリー解体 — ナサニエル・ホーソーン作品試論』英宝社, 2004.

三宅卓雄「混沌の夜への眼差し — 「親戚モリヌー少佐」のディスクール — (ホーソーン
短篇論2)」、『どう読むかアメリカ文学 — ホーソーンからピンチオンまで —』あほ
ろん社, 1987.